



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑧～

ヤング？ケアラー？



松岡園子

今回の2号前、対人援助学マガジン51号に書かせていただいたAちゃんの話の続きです。あれ以来、時々Aちゃんと会い、近況報告をしあっています。先日Aちゃんから、入院中のお母さんのことを詳しくききました。

入院中に認知症の症状がでてきてしまい、退院できたとしても在宅で過ごすのは難しくとのこと。お母さんが入所できる施設を探しているとのことでした。お母さんが住んでいた家を引き払うことにし、ほぼ1人で片づけや手続きをしたということです。

「何杯ゴミをほかしたか……」

私なら、とても1人でそんなことができるだろうかと思うほどの片づけや手続きを短期間でやったAちゃんはすごいと思いました。

20年弱の時を経て、私とAちゃんを再会させてくれたAちゃんのお父さんが亡くなり、お母さんも大変な状況です。そこでふと私は現在の自分の母のことを思いました。

私の母はといえば、足腰が弱ってきてはいるものの、元気に家で過ごしています。毎日服薬は必要ですが、統合失調症の症状も感じられないほど落ち着いています。私は10代がいちばん大変だと感じたけれど、また違う時期にもっと大変な状況になる人だっている。

一般的には子どもが10代の間は親世代も若く、困ったことがあっても親世代に頼ればなんとかなります。しかし10年、20年と経つうちに状況が変わり、今度はこちらが親世代を支える番になる。また、育児に携わる人もいるでしょう。介護や育児をケアと呼ぶとすれば、時間の経過とともに、ケアに関わる人が次第に増えていきます。それは仕事、家事や自分のしたいことと並行して生活の中に入り込んできます。さらに、自身や親以外の家族が病を抱えるということも考えられるでしょう。

それを10代で迎える人もいれば、20代、30代で迎える人もいます。ただ、10代の間は

周囲に同じ状況の人が見当たらず、自分は家族のケアをしながら自分の学校生活も送らなければならぬ、それは珍しいことだと感じることもあると思います。また、人生経験が少ないために物事を解決する発想に乏しいなど、悩むことも多いと思います。

しかし、10代だから大変で、20代以上になると大変ではないからサポートは必要ないとも言い切れるものではありません。家族の状況はそれぞれ違って、必要なケアもその家族1人ひとり違います。ケアを担う人の経験や考え方、性格、周囲の環境などによっても大変さが変わってくるのではないのでしょうか。

その人がいくつであっても、周囲の理解と、そうした環境の変化を迎えた時に対処していく力があれば、なんとか乗り切っていくことはできるのではないかと思います。周囲にできることはその人の状況を理解することと、乗り切るために必要な力を考え、支えることではないのでしょうか。

私の周囲にはAちゃんの他にも、母親のケアを担っているBちゃんという同級生がいます。Bちゃんは2人の子供の育児と家事、自分の仕事をこなしながら、離れたところに住む母親の所へ通っています。Bちゃんが20歳の頃にお母さんは脳梗塞で倒れ、その後遺症で麻痺が残っています。お父さんは昨年亡くなりました。Bちゃんとも時々会うのですが、「会う前に、お母さんをお風呂に入れてから行くわ」

と当たり前のように言います。彼女にするとそれが生活の一部のようにさりげなく言います。私が同じ状況だったら、こなしかれるだろうか？と思うほどの仕事量のように感じます。しかしBちゃんにすると、それが日常なのです。

Aちゃん、Bちゃんと話していると、ヤングケアラーと呼ばれる人たちと、ヤングではなく（？）ケアを抱える人とは、なにが違うのだろうと考えることがよくあります。

10代で、周囲と何か違う体験をしていると感じたとしても、20代30代と時を経るにつれて、周囲との環境の差をさほど感じられなくなると思います。それは、周囲の環境も変化していく（親世代が定年を迎えたり、病にかかる、介護が必要になることなどが増えてくる）からです。いま私は40代ですが、「母には持病がある」と話しても、病の種類はそれぞれですが、周囲には家族をケアする体験をしている人も多いため、それを自然に受け入れてもらえていると感じます。私も自分の経験からケアを担う人の気持ちを理解することもできますし、福祉サービスの情報やこれまでに役立った知恵を伝えることもできます。

今の私ぐらいの年齢になると、家族のケアをすることはなにも特別なことではなく、自然なことだと感じられるようになってくると思います。

また、ケアを他の人に任せたり、ケアをしない選択をする人もいると思います。それは人それぞれの選択です。どんな選択をするにしても、一旦は目の前の状況を受け入れて対処し、日常を創っていく。それはいつでも誰でも起こり得ることなのだと、自分のこれまでを思いながら、Aちゃん、Bちゃんの姿を見て考えさせられました。